原　著

状況的学習を用いたソーシャルスキル向上プログラムの実践報告[1)]
―旦過市場大學堂における「たんたんマルシェ」の取り組み―

命婦　恭子

＜要　旨＞

本研究の目的は、市場を活用して、状況的学習によるソーシャルスキルを向上するためのプログラムを実施し、その成果を考察することであった。対面販売を行う場である市場の特性をとらえ直し、ソーシャルスキル向上による子育て支援に活用できる社会資本として見立てたところに本プログラムのオリジナリティがある。

事例の分析から、市場では対面でしか起こりえない働きかけが偶然になされることで、双方向的なコミュニケーションが現れており、その状況から親子ともに新しいスキルを習得していることが示された。さらに、それがモデルとなり他の参加者によるスキル学習へと展開していく様子も観察された。このように、偶発的な状況に応じて次々と学習が展開していくことは状況的学習の利点である。以上のことから地域での関係性が希薄化している都市部でも、相互交渉の実践共同体に参加しやすいようなプログラムを考案することによって、状況的学習を用いたスキル習得が可能であることが示された。

キーワード：ソーシャルスキル、子育て、状況的学習、社会資本

Ⅰ　はじめに

1．子育てにおけるソーシャルスキルの重要性

子育て中の親は、産後うつ病や育児不安などによるメンタル・ヘルスの問題を抱えがちであり、子育て中に心理的健康度を保つためには、配偶者のみではなく、複数のサポート源から支援を受けることが有効であるといわれている（西出・江守，2011）。また、乳児の母親を対象とした研究では、孤独感はママ友達および友人がいるほど低く、夫や友人、義父母や両親などとの接触頻度が高いほど低いことが示されている（馬場・村山・田口・村嶋，2013）。その一方で、佐藤・田髙・有本（2014）が都市部の乳幼児の母親を対象に行った調査では、全国調査の結果である71.7％と比較して核家族の割合が89.5％と高く、近所とのつきあい方が挨拶程度以下と回答したものが48.8％と半数近くを占めており、国の調査と比較して高いということが指摘されている。また、対人的つながりの欠如あるいは不満感が母親の孤独感を高め、主観的幸福感と負の関連があり、母親のメンタル・ヘルスの不調に影響していることが示されている。本研究を実施した北九州市は、約98万人が暮らす都市部であり、2010年の国勢調査の結果によると、６歳未満の子どもがいる世帯のうち90.1％が核家族であり、親が孤立し孤独感を感じやすいことがうかがえる（北九州市，2011）。そのため、北九州市のような都市部で子育てをしている親にとって、対人関係を広げ、サポートネットワークを形成することがメンタル・ヘルスを保つための一つの課題といえる。

対人関係を広げるためには、個人のソーシャルスキルの育成が重要となる。ソーシャルスキルとは、「対人関係における自らの目標達成を目指して、相手に適切かつ効果的に反応するために用いられる言語的、非言語的な対人反応」と定義される（相川，2010）。すなわち、ソーシャルスキルには、非言語的な側面が含まれており、対面によるコミュニケーションで習得されることが望ましい。また、ソーシャルスキルは学習されたものであり、言語的教示やオペラント条件付け、

西南女学院大学短期大学部保育科
１）本研究は平成26年度北九州市学術・研究振興事業調査研究助成金（研究代表者：命婦恭子）の助成を受けた。

モデリング、リハーサルといった学習のメカニズムにより習得される（相川，2010）。これらの学習を進めるためには、学習が可能な体験をすることが重要であり、そのための環境が準備されなければならない。核家族化や地域での人間関係の希薄化により、ソーシャルスキルを学習する機会が減少しているが、日本においてこのような問題がいわれるようになって久しく、核家族化は２世代目あるいは３世代目に入っている。すなわち、現在子育てをしている世代は、３世代家族での生活や地域の大人たちとの関わりといったソーシャルスキルを習得するための機会を得にくい環境で成長してきた世代だといえる。そのため、子育てサークルや「ママ友」といわれるような子育てをしている友達との関係形成を支援する動きもみられるが、それでは、対人関係の広がりが年齢や性別の偏ったものになってしまうことが問題である。

また、親世代のソーシャルスキルは、次の世代である子どもたちのソーシャルスキルを育成するためにも重要である。核家族化が進む中で子どもがスキルを習得するために言葉による教示を与えたり、モデルとなったりすることができる大人は、親とその家族や知り合いが中心となる。そのため、親のソーシャルスキルを豊かにし、対面的な対人関係を広げることは、親のメンタル･ヘルスを支えるだけでなく､子どものソーシャルスキルを豊かにしてくれると考えられる。

２．状況的学習の特徴

ソーシャルスキルの学習について考えるときに、重要な概念の一つに状況的学習があげられる。状況的学習とは、学習者が実践共同体の一部に加わりながら、その共同体の中で実践されている技術や知識を習得していく学習プロセスのことであり、学習を知識や技術が受容され内在化していくプロセスと考えるのではなく、実践共同体への参加のプロセスとみる考え方である（Lave & Wenger, 1991）。学習者は正統的周辺参加と呼ばれる状況で共同体に参加する。正統的周辺参加とは共同体に参加することが認められているが、知識も技術も不足しており十全的に参加できるわけではなく、また共同体の一員であるというアイデンティティも充分に形成されているわけではない状態を指す。このような状態から、参加の程度を深めていくプロセスが学習であり、技術や知識の深まりと参加の深まりは相互に関連したものである。

従来のソーシャルスキルトレーニングでは、日常場面で活用するスキルの習得のために、専門家が学習の場を設定して学習者が特定のスキルを意識しながら学ぶという学習形態が一般的であった（阿部，2014 et al.）。ソーシャルスキルの実践共同体とは、人と人とが関わり、コミュニケーションを図っている日常生活の場である。状況的学習によってソーシャルスキルを学習するということは、地域で日常的に実践されているコミュニケーションに参加し学習するプロセスであり、学習が深まることによって地域でのコミュニケーションへの参加が深まることになる。このような学習機会をえるためには、地域でのコミュニケーションに正統的周辺参加できる糸口を提供することが有効であると考える。

本プログラムは、状況的学習という視点から、ソーシャルスキルの習得のために実際に対面で行われているコミュニケーションの場に参加する。具体的には、プログラムの実施場所が市場の店舗という対象者以外の出入りがある開かれた空間であり、プログラムの中に、その日の昼食を市場の中でそれぞれが買い物をする時間を設けている。プログラム企画者は、白いご飯だけを準備しており､それを持って市場の中を歩いて、おかずになるものを購入するのである。買い物をすることで商店主などと自然に会話をすることができ、主体的にコミュニケーションに参加できる環境を設定している。

３．社会資本としての市場の特徴

本研究では、プログラム実施環境として旦過市場を選択した。旦過市場は､北九州市小倉北区に立地する。交通の要所であるJR小倉駅から徒歩10分ほどであり、生鮮食品を販売する店舗が軒を連ね“市民の台所”として親しまれている。近年、テレビ番組や旅行ガイドなどのメディアやインターネットのソーシャルネットワーキングサービスに掲載されることにより、国内外からの観光客が訪れる場所となっている。社会資本としての旦過市場の特徴は以下の８つにまとめられる。

特徴の１つめは、市場のシステムとして対面のコミュニケーションが必須であることがあげられる。初めて市場での買い物をする人にとって、商店主との対面コミュニケーションは、緊張することもあるが、避けることはできない。その一方で、購入するときに最低限発言する内容は、ある程度決まっており、“何を言ったらいいのか全くわからない”という事態になることもない。そのため、“必要に迫られて何らかの対面コミュニケーションをする”という場面を自然に設定することができる。すなわち、ソーシャルスキルを

学習するための状況を提供しやすい環境といえる。

２つめは、先にあげたことから派生することであるが、来訪者が主体的に参加する場所であるということがあげられる。現代社会の特徴として、テレビやインターネットによる通信販売などの発展により、対人での双方向的なやりとりを行うことなく、買い物をすませることができる。市場では、対面による双方向のコミュニケーションが必要であり、ノンバーバルな表現も含めて、相手の発信を読み取り、自分からも積極的に働きかけることで、自分の希望に添った買い物をすることができる。コミュニケーションのきっかけは対象からの働きかけであったとしても、自らが主体的に行動することによって目的を果たすことができる場所である。そのため、プログラム参加者のコミュニケーションへの主体的な参加を自然に引き出すことができる。

３つめは、日常的に対面コミュニケーションが行われている場所であるために、来訪者が対面する商店主や従業員たちのソーシャルスキルが高いということがあげられる。市場で販売される商品は、生鮮食品が多く、季節ごとに変化するものが多い。また、来訪する客も様々で、近年では、アジア諸国からの観光客も増えている。そのような中で、商店主や従業員たちは、マニュアルのない対面販売で柔軟にコミュニケーションするためのスキルを研鑽している。このようにソーシャルスキルの高い大人が大勢いる場所は希有な存在といえる。

４つめに、安定したコミュニティを形成しながら外部の人が多く来訪する場所という特徴がある。先に述べたように、地域住民が繰り返し訪れることも多いが、国内の様々な地域やアジア諸国の観光客が訪れることも多い。市場は、商店主や従業員による安定したコミュニティが築かれていながら、閉鎖的な場ではなく、新しい来訪者を受け入れる準備が充分整っている場所である。すなわち、コミュニケーションのためのスキルが未熟な者にとって参加しやすい実践共同体である。

５つめは、高齢者の存在があげられる。核家族の中で育った子育て世代のソーシャルスキル向上を考えるときに、高齢者などの異質な他者とのコミュニケーションが重要なポイントであると考えている。母親と子どもだけが参加する子育てサークルでは、同世代で同じような生活や価値観の人々が集まりやすい。スタッフとして高齢者が参加していたとしても、子育て支援に興味・関心のある高齢者であるという点では、等質に近い存在といえる。旦過市場でふれあうことができる高齢者は、商店主や従業員、来訪した客などであり、それまでの人生経験や子育て経験も様々で多様な価値観を持っている。市場ではそのような高齢者と自然に会話することができる。

６つめは、「食」という子育てに密着したテーマを多様な側面から取り上げられることである。旦過市場の商店の多くが食べ物を販売している。かつ、先にも述べたように品揃えは季節ごとに変化する店が多い。そのため、１年を通じてプログラムを実施したとしても、画一的ではなく多様で変化に富んだテーマを設定することができる。

７つめは、プログラム参加目的以外でも訪れる理由があるということがあげられる。今回も、参加者がプログラム終了後やプログラム開催日以外に買い物をする様子がみられ、プログラム参加以外でも訪れる理由がある場所であることが示された。本プログラムで、ソーシャルスキルを学習する実践共同体は、プログラムとそれを取り囲む市場という２重の構造になっている。プログラムは、恣意的に作られたものであり、旦過市場という日常的に地域に存在する実践共同体へ継続的に参加するための入り口であると理解できる。目指している学習プロセスは市場への参加とそこでの状況的学習である。そのため、プログラム参加以外で訪れる理由がある場所ということが重要な要素となる。

８つめに、大學堂の存在があげられる。“街の縁台”を自称する大學堂は、柔軟性に富んだスペースであり、様々な人を受け入れて対面のコミュニケーションを行ってきた。市場で日常的に繰り広げられる人と人とのやりとり、すなわち市場の日常の風景を人類学の知見からとらえ直すためにフィールドワークを実施する仕掛けが大學堂である。また、大學堂はマスコミに多く紹介されていることから、旦過市場を訪れた観光客が集まる場所でもあり、プログラム実施中にも国内外からの客が来訪し、参加者とコミュニケーションすることが可能である。その様な場所をプログラムの拠点として活用できるということも旦過市場の特徴ととらえることができる。

４．市場における大學堂の役割

竹川（2013）は、市場のお客さんの中には、ときおり見かける常連さんもいれば、めったに現れない人もいるし、初めて利用する人もいるが、その誰もが顔の見える“常連さん”になる可能性を秘めていることを指摘し、人と人とをつなげる場所であることから「市場はメディアだ」と提唱する。このような市場の社会

資本としての側面に注目し、2008年に「大學堂」という場所が活動を開始した。大學堂とは、音楽や演劇、学術的な講演や社会問題についてのシンポジウムなど様々なイベントが開催され、“街の縁台”を自称する柔軟性に富んだスペースである。大學堂は旦過市場および北九州市立大学の教員・学生などの共同事業として立ち上げられ、九州フィールドワーク研究会により運営されている。九州フィールドワーク研究会とは、フィールドワークによる社会調査に興味を持つ人々がサロン形式の研究会を続けている団体である。北九州市立大学の学生だけではなく、その卒業生や他大学の学生、社会人などのメンバーが集まっている。このようなメンバーによって運営されている大學堂の役割は、地域支援や街づくりにとどまらず、市場での日常生活に当事者として参加し、人類学の知見を利用して街を見立て直すことである（竹川，2009）。すなわち、大學堂とは市場とそこにいる人々の生活に参加し関係を形成することを通してフィールドワークを実践するための仕掛けである。人と人とが対面でコミュニケーションする状況にソーシャルスキルは埋め込まれており、対面コミュニケーションの実践共同体として市場をとらえると、状況的学習によりソーシャルスキルを習得するためのプログラムを実施する場所として市場の中にある大學堂が適していると予想できた。

以上のことから、旦過市場と大學堂を、状況的学習によりソーシャルスキルを習得することを目指すための最適な環境と考え、親子参加型のプログラムを実施した。本研究の目的は、このような新しいソーシャルスキル向上のためのプログラムを提案し、そのプログラムで観察された事例を通して、参加者のソーシャルスキルの変化を考察することである。

Ⅱ　プログラムの目的と概要

1．プログラムの目的

本プログラムの目的は、大きく２つある。短期的には、親のソーシャルスキルを向上させることである。スキル向上によって、ソーシャルサポートを受けやすくなりメンタル・ヘルスの維持・向上に貢献することを長期的な目的としている。またもう一つの長期的な目的は、もう一人の参加者である子どものソーシャルスキルを向上し、多世代と交流でき、より広いサポートネットワークを構築できる子どもを育成していくことである。

2．プログラムの方法と内容

2014年11月から2015年１月にかけて、全５回のセッションを実施した。毎回２時間のセッションは、30分程度の講座とご飯が入った丼を持っての市場での買い物、食事という３つの要素で構成されていた。各回のテーマと講師をTable １にまとめた。

3．対象者

初回の参加者は親子５組であった。旦過市場での買い物経験がない親は３名であった。年齢と性別はTable ２に示す。父親がプログラムに参加した場合は、父親の年代も記載した。

Table １　各回のテーマと講師の一覧

期日		テーマ	講師	講師所属
第１回	11月15日	お茶とお茶請けのおいしい関係	辻　利之	辻利茶舗
第２回	11月29日	みんなで食べて、みんなで育つ－協同育児のすすめ－	竹ノ下祐二	中部学院大学
第３回	12月13日	安全でおいしいお米を“にぎる”おにぎり講座	藤島　嘉子	若宮農民組合
第４回	１月10日	南の島の子育てに学ぶ	木下　靖子	北九州市立大学
第５回	１月24日	何でも食べよう！	竹川　大介	北九州市立大学

Table ２　参加者の性別と年齢

	親の年齢	児の性別・年齢
Ａ親子	母30代	女児・２歳
Ｂ親子	母40代・父40代	女児・６歳
Ｃ親子	母30代	女児・６歳
Ｄ親子	母30代	男児・５歳
Ｅ親子	母30代・父30代	女児・６歳

Ⅲ　事　例

１．プログラム参加者以外との関わりの変化

１）買い物の行動の変化

①　Ａ親子

プログラム参加以前には旦過市場での買い物経験がなかったAmさんとａちゃん親子（以下大文字アルファベットはTable ２に対応している。大文字とｍは母親、ｆは父親を小文字表記のみは子どもを表す）は、初回の買い物の時間には、母親が子どもの手を引いて市場を回り、唐揚げと白和え、ａちゃんの好物の煮豆を購入すると、他の親子よりも短時間で会場である大學堂にもどり、食事を開始した。市場での買い物をあれこれ楽しむという雰囲気はみられず、必要なものを買ってきたという印象だった。２回目は欠席し、３回目以降は、Amさんがプログラム参加者やスタッフと積極的に会話する様子がみられた。また、買い物時間が徐々に長くなり、いろいろなお店を見ているようであった。４回目の振り返りで「ちゅうちょすることなくお店の人と話をしながら買い物できた」と内省を記載していた。５回目では「前日から何を食べたいか考えながら来た」と記載しており、市場での対面販売への関与が深まっていた。

②　Ｂ親子とＣ親子

参加した子どもたちのうち、ｂちゃんとｃちゃんはいずれも６歳の女児で、初回から二人で遊ぶ姿がみられた。２回目からは買い物の際も一緒に行動する様になり、親が何を買うか迷っていたり、支払いをして商品を受け取ったりしているあいだに、子ども達が親から離れてしまうことがしばしば起こっていた。２回目ではそれぞれの親であるBmさん、Cmさんが「離れたらダメよ」といった声かけをして、どちらか一人、あるいは両方が子どものそばにいた。４、５回目になると、子どもたちだけで市場内を歩き、おしゃべりしながら店先をのぞいてまわり、市場の商店主から声をかけられ会話をする場面がみられた。親は、目視で子どもの様子を確認しながら買い物を続けていた。

２）買い物以外の関わり

次に商店主からの働きかけがきっかけとなった親子の行動の変化の事例をあげる。プログラム初回、市場内でご飯が入った丼を持って歩いている子どもに対して、商店主の一人が、売り物であるシラスをサービスで丼にのせてくれた。５人の子どものうち３人は初めて市場に来ており、ごはんを持って外を歩くことも新奇な体験であったが、さらに知らない大人に呼び止められてごはんの上にシラスをかけてもらうということは、面白いこととして体験されたようであった。その後も、シラスはくり返しおかずとして選択されており、ｂちゃんとｃちゃんは毎回、商店主と会話しながらシラスを購入していた。ｂちゃんは４回目に「シラスありがとう」と書かれた商店主の絵を描いて持参した。商店主はそれを店に掲示してくれた。Bmさんは「絵を描いて行くって（ｂちゃんが）言うから、えー、どうかな、迷惑じゃないかなと思ったんですけど。飾ってくれたんで（ｂちゃんが）喜んじゃって」とスタッフに笑顔で報告した。ｂちゃんの絵を見たcちゃんは、５回目に「シラスのおじちゃんへ」と書かれたシラスを買うｂちゃんと自分の絵を描いて渡していた。「ｂちゃんの絵を見て、自分も持って行くって言って描いたんですよ」とｃさんは笑顔でスタッフに報告した。その後、商店主は店の中に２枚の絵を並べて掲示してくれた。

２．参加者同士の関わりの変化

プログラム参加者内での子どもたちの関係は、初回ではそれぞれ別々に遊ぶ様子がみられ、一緒に遊ぶ様子はｂちゃんとｃちゃんのみでみられた。その他、ｂちゃんが絵を描いている様子を見ていたｄちゃんが、ｂちゃんが書き終わったあとに同じノートに絵を描き始める様子がみられた。

２回目のプログラム終了後、大學堂のスタッフが講師を店舗の２階に案内する様子をみて、子どもたちが２階に上がりたがった。親は遠慮する様子をみせたが、大學堂スタッフが勧めたため、子どもたちも２階に上がり、脚立を使って天窓から屋根の上を見るなどして遊んだ。脚立に登って天井にあいた穴から顔を出して、旦過市場のトタン屋根が連なる風景を眺めるという行動は、大人にとっても珍しい体験であり、ワクワクするものの様であった。そのため子どもたちだけではなく、親も順番に脚立に登って景色を眺めた。Bmさん、Cmさんは少し戸惑いながらも、ｂちゃんとｃちゃんが「ママも（登ろう）」と声をかけると、脚立に登って歓声を上げていた。Dmさんは、脚立に登るのを躊躇しているｄちゃんよりも先に登って景色を眺めていた。

この回以降、終了後に大學堂の２階で遊ぶことが自然と定着し、子どもたちにとってはプログラムに参加する目的の一つとなった。４回目終了後は、その回だけ参加したBfさんが２階に移動して子どもたちと遊

び、母親は１階に残りおしゃべりをしていた。ときどき子どもが階段から顔を出して「今、ロボットに襲われてるところ」などと報告したが、何をして遊んでいるのかは、１階にいる親たちにはよくわからず、「大丈夫かな？」と２階を見上げる行動があったので、スタッフの一人が２階の様子を見に行って遊びの様子を簡単に伝えると、親同士の話を続けた。その後も、親の中から誰か一人が階段の途中まで上がって様子を見て「あんまり暴れないでね」などの声かけをすることが数回あったが､それ以上の介入はしなかった。また、４回目のプログラムでは大學堂にストーブや火鉢があったことから、食事の時間に食材を焼くということを取り入れた。それまで、買い物から帰ってきた親子が順にご飯を食べていたが、この回は、ウインナーや魚のみりん干しなどそれぞれが買ってきた食材を同じ場所で焼きながら食べたので、全員で食卓を囲む雰囲気ができた。Efさんがたまたまストーブのそばに座っていたので、ストーブの上の食材の面倒をみる役割を自然と担当した。このように、プログラムへの参加の仕方に変化がみられたこと、大人だけで落ち着いて話をできる時間ができたことにより、４回目の終了後に交換された情報は、それぞれの住宅のことや子どもたちの性格特性についてなど、それまでより深い内容になっていた。

５回目終了後は、保育者志望の学生数名が子どもたちと２階に上がり遊んでいた｡親たちは､その回のテーマであった子どもの食生活について講師と話し込み、スタッフが数回様子を見て「元気に遊んでますよ」など簡単に報告するだけで、親が２階の様子を見に行くことはなかった。２回目終了後に初めて２階に上がって遊んだときには、大學堂のスタッフや講師といった大人が子どもたちに対応していたにもかかわらず、親も全員が２階に上がって、子どもたちの行動に対して「順番ね」「交代して」などの介入をしていたことと比較すると、子どもへの不必要な介入が減っている様子がうかがわれた。

Ⅳ　考　察

１．本プログラムの特徴

本研究で実践したプログラムの特徴として第一に、ソーシャルスキルを直接的に指導するプログラムではなく、活動の中での状況的学習によるスキル向上を目指している点があげられる。第二に、社会資本としての旦過市場を活用していることがあげられる。

都市化とそれに伴う核家族化や地域での人間関係の希薄化は、ソーシャルスキルを学習するための実践共同体への参加の機会が失われていることを意味している。それを補うためには、参加しやすい実践共同体とそれに参加するための支援が必要であると考える。本プログラムは、旦過市場という実践共同体への参加を促すための機能を有している。このような、対面販売を行う場である市場の特性をとらえ直し、ソーシャルスキル向上を目指した子育て支援に活用できる社会資本として見立てたところに本プログラムのオリジナリティがある。状況的学習によるスキル向上プログラムは、当然ではあるが状況に依存しているものであり、旦過市場のような対面による双方向的なコミュニケーションが埋め込まれた場があるからこそ実施できるものである。

２．状況的学習による参加者のソーシャルスキルの変化

１）親子関係の変化

買い物の場面で親は、子どもが市場の中を歩いても店舗や他の客に迷惑をかけない様子やそれほど遠くへは行かないことを観察し、目を離す加減を学習している。それはすなわち、子どもを連れて市場で買い物をするためのスキルである。市場での買い物は、それぞれの店で店主と会話し、支払いをし、商品を受け取る。子どもの手をつないだまま全てを行うことはできず、手を離すことが必要である。どのくらい手を離していいか、目を離していいかを学ぶことは、安心して市場で買い物をするためには必要なスキルである。

また、プログラム後の遊びの場面では、子どもたちがお互いに関係を作り、一緒に遊べるようになるのと平行して、親は子どもへの介入を減らしていき、親同士でのコミュニケーションを増やしている様子がうかがえた。２回目では全員の親が２階に移動して子どもに対して言葉による介入をする様子がみられたが、４回目は少しのぞいて声をかける程度となり、５回目では親と講師だけで話し込む姿がみられた。同じく遊びの場面では､親と子の対等な関係もみることができた。天窓から外をのぞくことは親にとっても体験をしたことがない出来事であり、親と子が等しく初めての体験をすることにより、親子が同じようにワクワクし対等に遊びに参加する様子がみられた｡これをきっかけに、食事のときに参加者同士の会話が増えるなど、プログラムの中でも親が楽しんでいる様子が観察されること

が多くなった。

本プログラムでは、このような行動の変化を起こすために、“子どもへの不必要な介入を減らして主体性を伸ばしましょう”とか“お母さん自身が子どもと対等な立場で楽しんでください”というような親への直接的な教示は行われていない。第２回目ではゴリラの子育てについて、第４回目では南太平洋の村での子育てについて写真や動画をみながら話を聞くという講座内容であり、これらのことは親が子どもへの関わり方について振り返る一助になったと考えられるが、その講座の中で具体的なスキルを教示することはなかった。また、従来から年齢や性別、国籍などが様々な来訪者と対面している大學堂のスタッフは、子ども達の「２階へ上がりたい」とか「（プログラム終了後）残って絵を描きたい」というような要望に対しても柔軟に対応していた。親は自分の子どもがその様に受け止められることを見て、自分自身の子どもへの関わり方を変化させていったとも考えられる。すなわち、プログラムやその後の状況に参加しながら、子どもたちの様子や商店主や大學堂のスタッフ、他の参加者といった他者のスキルを観察し学習されたと理解できる。

２）企画者が準備していない状況での学習

状況的学習を用いたソーシャルスキルの習得の利点として、企画者が意図して準備した学習環境を越えた状況が出現することによって、想定外の変化がみられることにある。前節で述べた、プログラム終了後の遊び場面は、企画者により準備されたものではなく、スタッフが講師を案内するという状況に参加することによって学習された行動である。

このように、企画者が準備していなかった状況での学習の事例は、買い物の場面でも起こっている。子どもは親が買い物をしている様子を見て、商店の商品をのぞき込んだり商店主と会話したりする行動を学習し、さらに、商店主から声をかけられたことにより自分達が会話をする対象として商店主を認識することになり、商店主との会話に参加する頻度を高めていった。そのコミュニケーションの一つとして絵を渡すという行動をとっている。子どもにとって知り合いの大人に絵を渡すということはすでに習得し実行しているスキルであり、それを商店主にも般化したものと理解できる。しかし、親にとって商店主に何かを渡すという行動はレパートリーになく、子どもの発案に戸惑いながらも同意し、実行することにより新しい行動レパートリーを獲得した。この行動は他児によるモデリングが行われ、その際には親も戸惑うことなく実行できていた。

企画者は、昼食の買い物をするためにご飯を持って市場を歩くことをプログラムの中に組み込んでいたが、商店主から子どもたちへの働きかけは企画者により準備されたものではない。このように、偶然の、しかも対面でしか起こりえない働きかけがなされることで、双方向的なコミュニケーションが展開し、子どもが主体となり絵を持って行くという行動が発現している。これは、企画者の働きかけを越えた行動であり、さらに、それがモデルとなり他児による学習へと展開していった。このように、偶発的な状況に応じて次々と学習が展開していくことに状況的学習の効果を読み取ることができた。この一連の相互交渉のきっかけは、商店主から子どもたちへの働きかけであり、スキルの高い大人から対面で働きかけを受けることができる市場という環境に依存したエピソードであると考えられた。

Ⅴ．まとめと今後の展開

このように、本研究では社会資本としての旬過市場を活用し、親子で参加するソーシャルスキル向上のためのプログラムを実施し、その効果を検討することができた。近年の問題として、都市化や核家族化により地域でのコミュニケーションが希薄になり、ソーシャルスキルを学習するための実践共同体へ参加する機会が失われたことがあげられる。それを補うために、スキル習得のための特別な環境を設定し、特定のソーシャルスキルを具体的に教授しリハーサルする方法をとられることが一般的となった。しかし、様々なコミュニケーションの実践共同体が全て失われたわけではなく、地域に存在する共同体に参加しやすいようなプログラムを考案することによって、状況的学習を用いたスキル習得の場を提供することが可能であることが事例を通じて示された。地域でのコミュニケーションが希薄になって久しい都市部では、このような社会資本を新規に創ることは困難であり、現在ある共同体と出会い、見立て直し、当事者として参加することによってサスティナブルに活用していくことが重要である。

プログラムの今後の展開としては、スタッフとして参加する学生がソーシャルスキルを学習する場として活用していくことが考えられる。大學堂の中で行われるプログラムの進行も対面で行われる双方向的なコ

ミュニケーションであり、学生にとっては普段は接することが少ない子育て世代の親と未就学児という異質な他者と接することができる機会である。フィールドワークによる社会調査を志す学生にとって、異質な他者と出会いコミュニケーションするスキルは、獲得したいものの一つであろう。また、保育職を志す学生にとっては、未就学児とその親との円滑なコミュニケーションは、職業に必要不可欠なスキルである。このプログラムに参加し、状況的学習によってスキルを学習することで、大学の授業では教えることが難しい、双方向的なコミュニケーションにおけるスキルの習得が期待できる。

また、市場を訪れている高齢者とのコミュニケーションに、プログラム参加者がまだ充分に参加できていないと考えている。商店主だけではなく、客として市場を訪れている高齢者の中にも、子どもたちとふれあいたいという気持ちがあり、子どもたちへの働きかけがみられる。今後は、そのような場面も活用して、プログラムの対象者が参加する状況がより多様になるような展開が望まれる。

文　献

阿部　美穂子（2014）．発達に気がかりがある子どもの社会的スキル獲得を目指した子育て支援実践―親子ムーブメント活動を活用したプログラムの検討―　保育学研究，52（3），55-68.

相川　充（2010）．きょうだい構成が子どものソーシャルスキルの程度に与える影響　東京学芸大学紀要，61，91-105.

馬場　千恵・村山　洋史・田口　敦子・村嶋　幸代（2013）．乳児を持つ母や親の孤独感と社会との関連について：家族や友人とのソーシャルネットワークとソーシャルサポート　日本公衆衛生雑誌，60（12），727-737.

北九州市（2011）．人口等基本統計集（確報）第10表世帯の家族類型（22区分）別一般世帯数、一般世帯人員（６歳未満・18歳未満世帯員のいる一般世帯及び３世代世帯並びに母子世帯及び父子世帯－特掲）http://www.city.kitakyushu.lg.jp/soumu/01700015.html（2015年 9 月23日アクセス可能）

Lave, J., Wenger, E.（1991）. Situated Learning; Legitimate Peripheral Participation.（レイブ, J., ウィンガー , E. 佐伯胖（訳）（1993）．状況に埋め込まれた学習―正統的周辺参加　産業図書

西出　弘美・江守　陽子（2011）．育児期の母親における心の健康度（Well-being）に関する検討―自己効力感とソーシャルサポートが与える影響について―　小児保健研究，70（1），20-26.

佐藤　美樹・田髙　悦子・有本　梓（2014）．都市部在住の乳幼児を持つ母親の孤独感に関連する要因　日本公衆衛生雑誌，61（3），121-129.

竹川　大介（2009）．序章大學堂前史 大學堂運営実行委員会 大學堂と市場劇場（pp.80-87）野研出版.

竹川　大介（2013）．北九州市小倉北区／町中の贅沢なひみつ「旦過市場」 地域開発，588，30-34.

Practice Report of a Social Skills Training Program Using Situated Learning

Yasuko Meifu

＜Abstract＞

In this study, a program to improve social skills was carried out in Tanga Market. The theoretical framework for the program was situational learning. It was part of the originality of the program that considered a market to be the social capital for social skills training.

Participants modified their behavior by interactive communications with storekeepers in the market. The new behavior helped other participants to learn new skills. It was a case of modeling. Situations in the market developed their social skills during accidental interaction. Even in urban areas where the community has tenuous relationships, there are some communities of practice for interactive communications. Planners have to participate in the community and make a framework for comprehension of the community. The community of practice for interaction makes it more possible to learn social skills than by situated learning. The program allows participants to take part in the community of practice easily.

Keywords: social skills, child rearing, situated learning, social capital

Early Childhood Education and Care Department, Seinan Jo Gakuin University Junior College